

ビオトープが

都市にもたらすもの

市川 憲平

Written by  
Noritaka Ichikawa

土の付いた野菜を汚いと感じ、虫やカエルを怖いと感じる若者が増えているようだ。彼らにとって虫とは、ゴキブリの延長線上にあるゾットするものなのかもしれないが、ゴキブリやカエルに咬まれたとか、刺されたという話は聞いたことがない。決して怖い生き物ではないはずだ。彼らが土の付いた野菜を汚いと感じ、カエルや虫を怖がるのは、それらをよく知らないことが最大の理由のように思える。

都会で加工食品ばかり食べて暮らしていると、ヒトを含めて動物は、植物や他の動物の『いのち』を食べなければ生きていけないという、当たり前のことが見えなくなる。それらのいのちが、自然の『恵み』であることがわからなくなる。さらには、いのちや自然の重みが理解できなくなり、自然なんかなくても生きていける、などと錯覚するようになる。

以上のような錯覚や誤解は、自然と切り離されて育った都市住人の、自然体験の少なさに起因するものと思われる。狩猟採集の長い年月の中で、ヒトは自然を感じ、それを楽しむ『ころ』を発達させたが、個人のレベルにおいては、それは自然を体験する中で少しずつ発現するものだ。子供たちには、泥まみれになってメダカや水生昆虫を追いかけることができる場が必要だが、最近では農村部にもそんな場所はほとんど残っていない。

私は、1999年から姫路市郊外の放棄されていた<sup>やっただ</sup>谷津田(\*)を借り、ボランティアとともに周年水を湛えた「田んぼビオトープ」をつくった。半世紀前の農業が近代化する以前に、水田とその周囲にあった自然環境を再生できないだろうかと考えたためだ。また、直前に放した養殖アユを手づかみさせるアユ狩りのような『疑似自然体験』ではなく、その場所に根付いた本物の自然を、子供たちが体験できるような場所にしたいとも考えた。

最初の年にメダカ、ドジョウ、タガメ、タニシなどを放し、それらが定着するかどうかを追跡すると同時に、私たちのつくった浅い池に、どんな動物が訪れるかを5年間調査した。結果は大成功で、最初に放した動物の多くは、この地に定着した。また、毎年6種類のカエルが訪れて繁殖した。様々な水生昆虫やトンボが訪れて繁殖した。ヘイケボタルも復活し、最初考えていたような半世紀前の里の自然が復元された。

再生されたものは都市ではなく、里の自然だ。しかし、ヒトが自然の一部であることを忘れて都市再生などできるはずがないと私は考えている。この田んぼビオトープは、2004年からは発展解消して姫路市立の体験学習施設になり、だれでもが利用できるようになった。そこは、自然体験の少ない都市の子供たちが、思う存分泥にまみれて自然と一体となった自分を感じることができる場所だ。ここで自然を体験し、自然を感じることを磨いた子供たちが、都市再生の大きな力になってくれることを願っている。

CEL

(※) 谷津田：台地や丘陵地の間の浅い谷(谷津)につくられた田。  
雑木林などに囲まれ生物相も豊か。



市川 憲平 (いちかわのりたか)

姫路市立水族館主任水生生物専門員、島根大学生物資源科学部非常勤講師。1950年生まれ。東京水産大学増殖学科卒業。1991年にタガメの繁殖戦略に関する研究で京都大学理学博士。水族館での業務のかたわら、ビオトープづくりなど自然環境を保全するための活動や環境教育活動に努める。著書は、『タガメはなぜ卵をこわすのか?』(偕成社)、『田んぼの学校・タガメビオトープの1年』(偕成社)、『親子関係の進化生態学』(共著、北海道大学図書刊行会)など。